校長室だより～燦燦～ №６７０

その後のカニピラフ

2022.12.14

中学２年生の１２月に、ソフトテニス（軟式テニス）部顧問の先生に連れられて、郡山に全日本レベルの大会を見に行った。その帰りに、レストランに入り、生まれて初めて「カニピラフ」を食べた。緊張しながらも、「世の中に、こんなおいしいものがあるのか」と思ったことを覚えている。

顧問の先生の車の車種も色も覚えている。カニピラフを食べたお店の雰囲気も覚えている。初めて全日本レベルのプレーを見て驚いたことも覚えている。ボールがアウトしていても、肉眼ではわからないほどだった。ボールがラインにぎりぎり接しているかどうかのレベルだった。

この日は、一流選手のプレーに感動し、カニピラフに満足することができた特別な時間となった。何よりも、車の都合で４人しか連れていくことができない状況の中で、自分が選ばれたことが一番うれしかった。

このエピソードは、以前もこの校長室だよりで紹介した。問題は、何度もカニピラフのレストランの前を通りながらも、４０年以上もの間、一度も訪れていなかったことである。いつも前を通るたびに気にはなっていた。「まだある」お店が存在していることに安心していた自分がいる。

先日、遂にカニピラフのレストランに入った。きっかけは何気ないことだった。週末、郡山に行くことになった。ランチをどうするかという話になった。今までも、このパターンはあった。今回は、ぜひ行きたいというお店のリストが、ちょうど空の状態だった。そこで、家人に「行きたい店があるんだけど」と切り出した。そして、行くことになった。

店に着いた。すでに数台の車が止まっていた。店に入る。店の様子は昔のイメージのままだった。変わっていない。重厚な佇まいの洋食屋さんである。ちょっと期待しながらメニューを見る。なかった。カニピラフはなかった。エビピラフもない。ピラフ自体がない。残念ではあったが、何かすがすがしさを感じていた。きっと、カニピラフを食べたとして、イメージと違っていたら、がっかりする自分がいる。メニューにないのであれば、あきらめがつく。家人が余計なことを言った。「カニピラフをつくってもらえるか聞いてみたら」さすがに躊躇した。

お店は、若い男性がホール係として、テキパキとそつなく動いていた。だんだんと混んできて満席となった。すると、年配の女性が料理を運んできた。しばらくして、今度は年配の男性が料理を運んできた。きっと、この老夫婦が始めたお店なのだろう。たぶん、カニピラフをつくってくれたのは、あの男性ではないか。勝手に想像していた。それで満足だった。

あのカニピラフには出合えなかった。行くのが遅すぎた。今でもカニピラフというと、私の中では特別感がある。カニピラフとの出合いがそうさせている。一つの区切りをつけることはできた。カニピラフはメニューから消えても、お店が健在なのが一番である。これからも、お店の前を通ることを楽しみにしたい。